

ぼくは、新幹線にのっている。

「どこに向かっている？」

それは……言っても意味のないことである。

とにかく、ぼくは新幹線にのっているのだ。お腹のほうもすいているので、さっそく駅弁をひろげるとしよう。

「なにをたべるの？」

ええい、今から言う。

これだ。牛肉どまん中、いいだろう？

「それは奇をてらわないんだ」

それは、とはなんだ。

となりに人がいないので、遠慮なくたべられるのはありがたい。駅弁のにおいや音を気にして、こここそするのは疲れる。

割りばしで、ひとくち。

うまい。この塩っ辛さがいいのだ。甘みがたびたび顔をのぞかせてくれるから、いつその味に深みがでている。ご飯のほうも、やはりうまい。冷めていてもふつくらしている。

きつとお米がいいのだろう。

「きみに味の良し悪しがわかるのか？」

わかるとも。

「うそだ」ほんとうだ。

「どこに行くかはいいとして、じゃあ目的は？」

そんなに気になるか？

「気になるというより、言わなくてはならないとおもうのだけれど」
なぜだ？

「いいから、言ってくれ」

とくべつな目的はないのだが、強いて言うのであれば、自分探しの旅というやつだ。

「またまたそんな、恥ずかしいことを」

まあまあ、落ち着け。分かっている、自分探しの旅、という言葉が近ごろ滑稽じみているくらいは。とはいえども揶揄するようなやつらは、しよせん旅という旅すらもしたことがないような半可通にすぎないだろう。知る者は言わず、言う者は知らず。これであ

る。

「そうかな？」

だいたい、自分探しの旅をしているつもりでも、その実、観光に終始している人間ばかりなのだ。知っている、と言うには程遠い。

「きみはちがうと？」

そうだ。ぼくの場合そもそも旅というよりは、放浪、といったほうがいいな。

「浮浪だろう」

放浪だ。泊まる場所もごはんをたべる場所も決めていない。それどころか、そもそも目的地もゴールもスタートもないので、どうしようもなくなったとしても、無一文でさまよい歩くしかない。だが、それでいいのである。

「浮浪じゃないか」

せめて流浪といってもらいたい。

「流浪？ かつこすぎるだろう。きみの好みじゃない」

なぜ、電車でもバスでもなく、新幹線なのか。

単純明快だ。この場所からなるべく遠くへ離れたいからである。

ぼくは、ぼくの旅を放浪と銘打った。それなのに、初日からせいぜい隣県あたりでちょろちょろしていたってつまらないだろう？

「ねえ」

なんだ。

「すこしはさ、景色にも目を向けたらどう？ ずっと独白っていうのも、つまらないよ」
景色？ べつに言うほどのことはない。

「いやいや、思いつきり雪ふってるし」

このくらいの雪ならいくらでもふるさ。珍しいことじゃない。吹雪というわけでも豪雪というわけでも、夜の底が白くなっているというわけでもないのだから。

「普遍的なものを書いてはいけなわけじゃないんだよ？」

へえ。ぼくに、ものを説くつもりか。そうかそうか。えらくなったものだな。

「ほら、窓を」らん

ひとつ問おう。シリアス展開は好きか？

「きらいではないな」

聞き方がわるかった。取ってつけたような、シリアス展開は好きか？

「むしろわるくなっているような気がするけれど、うん、それはきらいだ」

これを見てみる。今まさに、ぼくはそれを感じている。

「ああ、たしかに。ずっとコメディタッチだったのにね」

しわだらけの風呂敷を畳んだとて、そこに新たな価値など生まれるものか。遠くから見れば美しい、なんていうのは、まったく人間だけにしておくべきで、こと創作においてはタブーであろう。いや、マナー違反であろう。

思いついたことがある。シリアスに舵を切ろうとするときは、これから先はシリアスになりますよ、と物語の中でだれかに言わせてしまえばいいのだ。これはこれは、なんと画期的なアプローチだろう！

「きみはなにを言っている？」

ははは。ぼくも、言わされている。

そういえば。

「なんだ」

おまえは、だれだ？

「おまえ？」

おまえだ。

「どこに指をさしている？」

だから、おまえだよ。ぼくと、おまえ。わかるだろう？

「いや、まったくわからない」

どうしてわからない。いままでのやり取りはいったいなんだったのだ。

「ぼくは、ぼくだけれど」

「おまえ」は「おまえ」だ。ややこしくすればいいというわけではない。

「むしろ、きみこそ、だれだ」

言うまでもないだろう？ ぼくは、ぼくだ。ぼくだけが、ぼくなのだ。

はあ。

たぶん、三次元的に解釈できない。

「同意するよ」

それに、もう、終点だ。

「終点？」

わすれたのか？ぼくは、新幹線にのっている。

「ああ。ぼくは、そうだったな」

なんだその言い回しは。降りるぞ。

「行くか」